

死体が流れてたり、山のように積まれてたりする情景を浮かべました。悲しい気持ちになりました。たった一発の原子爆弾でこんなに多くの人が死ぬのです。二度と原爆が使われないことを願います。

竹岡さんは戦争のことを思い出すと、とても苦しく悲しいはずなのに、必死に僕たちに自分の体験を伝えてくれました。僕はその姿を見て心を打たれました。戦争は二度と起こしてはいけません。絶対

平和記念資料館を見て



植田 智紀さん
(白井中学校)

兵器はもちろん、戦争は絶対にあつてはいけないと思えました。このことを少しでも多くの人に分かってもらうために、友達や家族にこのことを伝えられるといいと思います。一日も早くこの地球から戦争がなくなることを僕は心から祈っています。



佐藤 裕貴恵さん
(白根北中学校)

私たちは三日目に平和記念資料館へ行きました。館内には、原爆による熱で大きくゆがんでしまったガラス瓶や、血の跡が付きボロボロになってしまった服、そして

被爆された人たちの苦しく、悲しい姿が写された写真などもたくさんありました。あまりのショックにだんだん言葉を失いました。今まで私は戦争がもう二度と繰り返されませんようにと、これからの未来の平和ばかりを願っていましたが、もちろんこれからの平和を願う気持ちは今も全く変わりありません。でも平和記念資料館を見学して、自分が見落としていた重要なものを発見しました。

原爆、そして戦争全部において、尊い命を奪われた人々たち。大切なものを失われた人々たち。精神的にも、肉体的にも、大きな傷を負ってしまった人々たち。そんな人たちの大きな悲しみ、苦しみ、そして怒りを少しでも多くしつかりと、これから伝えていかなければいけない。そんなことは当たり前前代という人もいるかもしれませんが、私たちが思っている以上に、とても難しく、とても重要なことだと思えます。

私が資料館で見たのはまだまだほんの一部です。これからも戦争の事実を学び、これから変わっていく時代に伝えていきたいと思えます。平和を守っていく、そしてたくさんの人たちの悲痛な思いを語り継ぐ。この大切な二つを私は学んできました。皆さんももう一度平和とは何なのか、たくさんの人たちの悲しみはどんなに大きなものか、考えてみてください。



小池 くらみこさん
(白根北中学校)

一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が落とされました。たった一つの爆弾で多くの人たちの命が奪われ、今なお、病に苦しんでいる人も多くいるそうです。私は平和祈念式典に参列し、次の日、平和記念資料館へ行きました。

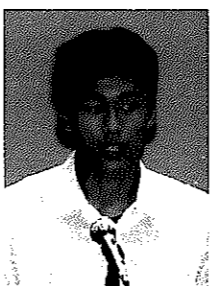
私は皆さんに伝えたいことがあります。それはあの資料館に行く、自分の戦争への意識が今まで以上に高くなるということです。私が行く前に想像していたよりもリアルで、中には涙が出そうになるようなものもありました。人の皮膚が溶けている模型、全身大やけどの写真、小さい子どものつめと皮膚、ボロボロに切れた服には、

血の付いた跡があり、赤みがかった石段のところには、黒い人影のようなものがありました。どれもとてもショックで胸を打たれました。

こんなに鮮明で、被爆当時のものがそのままにあると、感じ取るものが多すぎて、胸がいつぱいになりました。そして私は思いました。戦争は絶対やってはいけないという事です。ここに行くまでに広島映画を見たり、本を読んだりして、同じことを何度も思ったことがあります。でもその言葉に重さを感じさせてくれたのが、平和記念資料館でした。

私はこれからの未来、戦争の悲惨さをどれだけ多くの人に伝えていけるかが大きな課題だと思っています。「戦争は絶対やってはいけない」という言葉が、皆さんから白根市民へ、そして全国へと伝わっていくことを願っています。

平和なまちヒロシマ



加茂 康夫さん
(白根第一中学校)

広島。人類史上、初めて原子爆弾が投下された場所です。それから五十六年の月日がたち、今で

は東京にも決して後れを取ることのないまでに発展しました。しかし、原爆ドームの周りだけは時間が止まっている感じがします。放射線や爆風などによって、真つぐ伸びていたはずの木が、変な方向に曲がっていたり、家が跡形もなく崩れてしまっていたりと、本当に数多くの破片が当時の

恐ろしさを物語っていました。なぜ戦争をするのか、僕には全く分かりません。「戦争を行ってよかった」と言っている人もいれば、「だめだ。もう二度と行ってはいけない」と言う人も、さまざまです。僕はこの意見も聞いているとは思いませんが、僕の気持ちには、戦争はいけないことだと思えます。

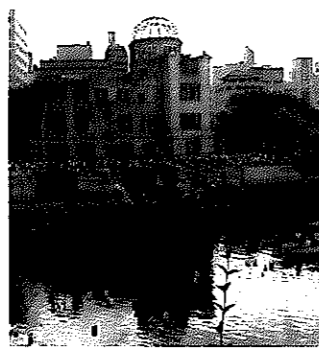
恐ろしい戦争を防ぐためには人と人とのつながり合い、コミュニケーションが大切だと思います。ささいなことですが、僕は何か大きな結果が出るのではないかと、思っています。

もう一つ広島に行つて圧倒されたことがあります。原爆ドームの辺りで、ある団体が横書きの大きな字で「戦争反対」や「平和とはなんだ」といった長い旗を壁の

ように掲げて、歩いている人たちに訴えかけているところでした。それを見た瞬間、「本当に被爆を受けた人の話を聞いた人たちは、戦争という言葉に敏感になるんだな」と思いました。僕も今はそうです。「戦争」と聞いただけで、胸が締め付けられるような感じになります。二度と行ってはいけない戦争。これは次の世代、つまり僕らにかかっていると思えます。

平和とは何なのか。この意味は「戦争がない」という人が多いでしょう。しかしそれだけで済ませてみても生きていけない人々がたくさんいます。その人々を助けてあげる。このことも立派な平和につながるのではないのでしょうか。僕はそう思います。

今回広島へ行き、僕は人生について考えが変わりました。これからは自分自身、平和につながることはほとんどやらなくていいと思えます。何でも積極的に取り組んでいくつもりです。そして僕らが大人になって世代を任されたときに、平和祈念式典で広島市長が言っていた「平和と人道の世紀」にするため、これからもできる限りの努力を続けていきたいと思います。

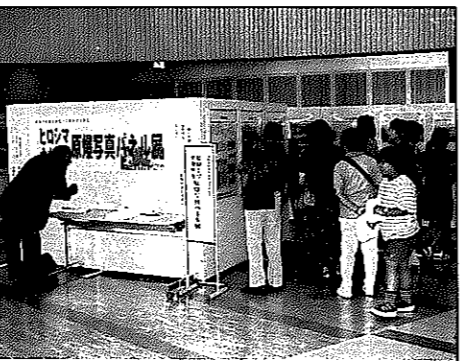


被爆体験をとおして

植田 規子さん (広島市東区在住)

非核平和都市宣言10周年記念事業の講話として、植田規子さんが「被爆体験をとおして」を演題に、自身の被爆体験を話してくれました。植田さんは14歳の時に、爆心地から1.5キロ離れた学徒動員先の工場で被爆。当時の状況を「世の中がオレンジ色に染まったと思った瞬間、音が何も聞こえなくなりました」「大勢の人が見るのも恐ろしいようなケガをしていました。私はそれを視野に入れないように、ただ友達の中を見失わないように避難しました」と植田さん。さらに避難先での出来事や市街地の状況、両親との再会、行方不明になった妹のことなど涙ながらに話してくれました。

植田さんは「原爆は歴史の中の出来事と思わないで、戦争の犠牲の上に今日の生活があることを、ときどき思い出してほしい。次の世代を生きる皆さんは平和の中で生きているから、平和を知っているから、世の中がおかしくなったときに「何か変だよ」と言ってくれと期待しています」と会場に語りかけました。



原爆写真パネルと原爆の絵の展示会が併せて行われました

8月29日まで「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真パネル」と「市民の描いた原爆の絵」の展示会が行われました。この展示会などの市の非核平和都市宣言10周年記念事業に対する感想をお願いしたところ、多くの皆さんからご協力をいただきました。ここでは、皆さんからの感想の一部をご紹介します。

・私は二十代のころ広島に行きました。平和記念資料館をはじめ、多くを見てきました。今もそのときのことが頭から離れません。

・戦争によって失われた「命」「人生」「思い出」を絶対にムダにしてはいけないと思う。そして世界中が平和であってほしい。

・子どもたちに、このような歴史的事実を知ってもらい、平和の尊さを感じてもらうことは大切なことです。

・日本人として、非核平和都市を目指すことの大切さを一人ひとりが若い人たちに伝え続けなければならぬ。「平和の大切さ」「戦争のない世界」と求める人が、少しでも多くなることを祈っています。

・テレビや本で八月六日と九日は知っている。そう思っていました。しかし今回の展示を見て、あらためて生々しい悲惨さを感じました。

・子どもたちは戦争のことをほとんど知りません。「戦争はいやだ」という気持ちを育てるためにも、このような取り組みをすることは大変意味のあることだと思えます。